

97 年人文教育革新中綱計畫
子計畫三 人文領域人才培育國際交流計畫

現代都市祭典與人際情緒網路
—以日本東京淺草神社三社祭為例

期末成果報告

指導暨補助單位：教育部

指導單位：教育部顧問室人文領域人才培育國際交流計畫辦公室

執行單位：國立台灣大學人類學系

計畫主持人：王梅霞 教授

執行日期：2008.5.7-2008.6.4

中華民國 97 年 7 月 15 日

目 次

- 一、計畫名稱
- 二、計畫目標
- 三、執行情形
- 四、經費運用情形
- 五、執行成果分析與檢討
- 六、結論與建議
- 七、附錄

一、計畫名稱

現代都市祭典與人際情緒網路

—以日本東京淺草神社三社祭為例

二、計畫目標

本計畫從日本現代都市祭典的研究出發，分析參與祭典者之間，所產生的人際情緒網絡之關係，主要以日文的文獻資料收集與在日本當地從事田野工作為研究方式。本研究以日本東京淺草神社三社祭為例；以現今日本東京淺草神社三社祭之祭典舉行過程為主軸，並以日本社會中「人之主體性」及其自我建構之方式為研究基礎，參與觀察日本祭典舉行之中，參與者團體成員相互之間的人際互動，以人類學中「人的觀念」以及「情緒研究」之理論為切入點，藉由觀察在現代日本社會祭典舉行當中，日本人所表現之獨特人際互動的方式，來瞭解日本社會文化具有之特殊性質。本研究不但能夠理解日本人獨特之情感文化表現，也可以對於現代日本社會有更進一步的理解，另一方面，也可以作為對於整個東北亞區域，包括台灣、韓國、日本之社會文化，具有跨文化研究比較的基礎。

進行方式為基於在日本當地所從事之田野工作進行深入調查，首先探討淺草神社三社祭之歷史起源，以淺草神社本身之起源與變遷的歷史過程為縱軸，探討日本從以前到現代都市社會祭典之舉行過程與方式，以及東京下町淺草地區在社會文化演進之下，都市發展對祭典與參與者成員彼此之間的關係變化產生的影響。調查方向主要以「人」為主體性，將焦點放在日本人參與祭典儀式中所表現出來的情緒、情感，並分析日本人在日常生活與神社的互動關係當中，在祭典之中所展現出來的情緒概念和所表現出之人與神之間的關係。

藉由在田野實際的參與觀察與和對報導人的深入訪談過程當中，理解日本人在參與祭典儀式當中，所具備的獨特之「義理」與「人情」的情緒概念，以及日本人在情緒上所展現出細緻之文化概念。以日本人的觀與日本人之情感、情緒研究為切入點，一方面對於日本社會獨特之宗教祭典儀式研究課題，與對於日本社會性質之理解有更廣闊的視野，另一方面，以日本人之觀與日本人之情緒、情感為著眼點，將來也能當作不同文化之間的比較基礎，而對於人類學宗教研究之理論的創新也能有所突破與發展。

本研究透過計畫執行者在日本慶應大學訪問學員之身分，實際與日本學者進行交流，引用大量的日文文獻，並參考日本學界方面各個學者對於日本社會宗教祭典儀式之研究，與日本人在日常生活之中，表現其情感以及表達其情緒的方式之研究；此外，透過在日本淺草實地的從事祭典儀式之田野調查，以參與觀察和深入訪談的方式，與當地的日本人接觸建立關係，從訪談中理解日本人在日常生活當中的人際網絡以及人與人、人與神互動的情形。透過實際參與日本人的生活以及觀察日本社會之祭典儀式，對於現代日本社會的宗教研究議題，有深刻的理解與創新的觀點。

三、執行情形

本計畫進行期程為 2008 年 5 月 7 日至 2008 年 6 月 4 日，總共為期 29 日。主要進行地點為圍繞淺草附近區域之日本東京市內，以及慶應大學圖書館、日本國會圖書館與台東區中央圖書館。

主要進行方式如下：

1. 文獻資料收集與分析：

主要以慶應大學圖書館與日本國會圖書館為主，收集日本社會祭典儀式的相關文獻資料。慶應大學之祭典研究中心藏書豐富，而國會圖書館網羅全日本的各項出版品，是宗教與祭典研究相關文獻資料的寶庫。以對於日本人的觀感，以及與日本人情感、情緒之研究的相關論文及文獻資料的收集分析為主，透過祭典儀式之起源與歷史資料之收集，以及日本人之情感、情緒相關表現方式之研究來分析，整理並建構出日本社會當中日本人獨特的情感與情緒之現象。

2. 於日本當地從事田野調查：

除了相關之論文與文獻資料的收集分析以外，本研究也著重於在日本當地實際從事田野調查工作，本計畫進行過程於日本從事田野工作，進行調查。藉由在田野實際的參與觀察與和對報導人的深入訪談過程當中，理解日本人在參與祭典儀式當中，對於所必須具備的獨特之「義理」與「人情」的情緒概念，以及日本人在情緒上所展現出的細緻之文化概念。

本計畫實際執行日程與內容如下表：

日期		起迄地點	工作內容
月	日		
5	7	台北-東京	抵達東京。住宿處與交通確認
5	8-10	東京-三田	慶應大學圖書館進行文獻資料收集
5	11-13	東京	日本國會圖書館進行文獻資料收集
5	14-15	東京	台東區中央圖書館進行文獻資料收集
5	16	東京-淺草	參與觀察淺草神社三社祭典前夜祭
5	17	東京-淺草	參與觀察淺草神社三社祭無形文化財 神樂神舞奉納
5	18	東京-淺草	參與觀察淺草神社三社祭神社神轎繞境儀式
5	19-20	東京-淺草	田野工作深入訪談： 1. 淺草神社神官 前往淺草寺社務所與淺草寺神官「宮司」「彌宜」「巫女」等人員進行深入訪談，瞭解淺草神社三社祭的歷史與起源。
5	21-22	東京-淺草	田野工作深入訪談： 2. 淺草寺負責寺僧 與淺草寺寺僧進行深入訪談工作，瞭解淺草寺與淺草神社之相互關係。
5	23-24	東京-淺草	田野工作深入訪談： 3. 町會會長 選定町會，與町會中主要負責人之町會會長進行訪談。
5	25-31	東京-淺草	田野工作深入訪談： 4. 町會祭典相關人員 選定町會，與各町會中負責祭典準備與進行的人員進行深入訪談。
6	1-3	東京-淺草	田野工作深入訪談： 5. 各町會青年會會長與成員 選定町會，與負責祭典進行之實際運作成員的青年會會長與成員進行祭典之相關訪談。
6	4	東京-台北	返回台北

五、執行成果分析與檢討

本計畫透過文獻資料收集與分析以及於日本當地從事田野調查方式進行，得到以下成果分析與檢討。

(一) 文獻資料收集與分析：

主要以慶應大學圖書館與日本國會圖書館、台東區中央圖書館與各大書店為主，收集日本社會祭典儀式的相關文獻資料。

1. 慶應大學圖書館與日本國會圖書館

--收集日本祭典儀式相關文獻與學者研究論文，獲得對於日本學界之祭典儀式

研究進一步理解。

2. 東京都台東區中央圖書館

--收集淺草及其周邊地方之區域性史料，瞭解淺草地區歷史之發展與其歷史脈絡。

3. 各大書店：紀伊國、丸善、三省堂書店等

--檢視近年來所出版方面對於日本祭典儀式與人類學宗教研究之相關學術性書籍。

(二) 於日本當地從事田野調查：

日本實地參與觀察獲得田野訪談資料，是本計畫之另一項主要目標。訪談對象與所獲得之成果如下。

- 1.淺草神社神職人員：宮司、彌宜、巫女
--主要針對淺草神社之神職人員訪談淺草神社之起源與歷史演變，以及神社祭典歷史起源與近年來之轉變。
- 2.淺草神社奉贊會會長
--訪問淺草神社奉贊會之組織方式與成員，以及其每年之選舉方式與過程。
- 3.地方町會三社祭祭典委員長
--訪問地方町會中參與三社祭典儀式之祭典委員長，瞭解祭典之各項準備、進行過程，以及各町會之間的人際互動關係與網絡。

藉由實際至日本收集相關資料以及實地從事田野深入訪談過程中，有下列之檢討。

- 1.研究日本祭典儀式之書籍論文雖多，但針對淺草神社三社祭之相關研究數量少，收集上需再花費更多心力。
- 2.隸屬於淺草神社 44 各町會氏子範圍甚廣，只能先由淺草神社奉贊會的統籌組織開始著手，再逐步認識擴展田野訪談對象，進而瞭解各町會之運作方式。

六、結論與建議

本計畫以收集日文文獻以及相關研究資料為主，並於日本當地實際從事田野調查工作，分析檢討之後，得以瞭解日本人在祭典中展現對於人與人、人與神之觀念。主要結論與建議如下：

- 1.從田野訪談過程當中，可以看出日本人對於神之情感情緒，類同於對於家族之觀念，也與日本社會結構重視團體組織具有密切相關性。所獲得之資料對於分析日本社會獨特之宗教祭典儀式，與日本社會性質之理解具有莫大助益。
- 2.台灣人類學界對於日本宗教祭典儀式之研究數量仍屬稀少，因此本計畫透過此次海外田野工作，進行日本祭典儀式之研究，具有開拓人類學研究之海外視野之作用。
- 3.此計畫為長期田野工作之一環，未來將持續觀察淺草地域整體包括淺草寺與淺草神社三社祭近年來之轉變，本計畫之成果將作為未來進一步擴展至整個東北亞區域包括台灣、韓國、日本的社會文化進行跨文化比較研究之基礎。

七、附錄

此次計畫所收集之民族誌資料之書目如下：

山折哲雄 編

2008 《日本人の宗教とは何か—その歴史と未来への展望》，東京：太陽出版。

小松和彦

2002 《神なき時代の民俗学》，東京：せりか書房。

鎌田純一

2007 《神道概説》，東京：學生社。

堀一郎 編

2005 《日本の宗教》，東京：原書房。

柳田國男

1998 〈日本の祭〉《柳田國男全集》第13卷、筑摩書房。

高木昭作，末木文美士

2005 《日本文化研究：神仏習合と神国思想》。東京都：放送大学教育振興会。

伊藤幹治

1984 《宴と日本文化》，東京：中央公論社。

宮家準

1990 〈祭と芸能〉，《民俗宗教へのいざない》，東京：慶應通信社。

2002a 〈民俗宗教のコスモロジー〉，《宗教民俗学入門》，東京：丸善。

2002b 〈祭りの要素と構造〉，《民俗宗教と日本社会》，東京：東京大学出版社。

2004 〈民俗宗教史の研究—宗教的伝統の解明をめざして〉，《宗教研究》，343号，日本宗教学会。

末木文美士

2006a 《日本宗教史》，東京：岩波書店。

2006b 〈神仏再考〉，《日本仏教の可能性》，東京：春秋社。

渡辺照宏

2004 《日本の仏教》，東京：岩波書店。

圭室文雄

2007 《葬式と檀家》，東京：吉川弘文館。

大桑齊

2003 《日本仏教の近世》，京都：法藏館。

- 小森陽一等 編
 2001 《コスモロジーの「近世」.2》, 東京: 岩波書店。
- 小熊英二
 1994 《単一民族神話の起源: 「日本人」の自画像の系譜》, 東京: 新曜社。
- 鈴木博之
 1999 《日本の近代—都市へ》, 東京: 中央公論社。
- 中村孚美
 1972b 〈都市と祭り〉, 《現代諸民族の宗教と文化》, 社会思想社。
 1993 〈町と祭り〉、塚本学 編、《日本歴史民俗論集5 都市の生活文化》, 東京: 吉川弘文館, pp. 205—236.
- 中野紀和
 1996 〈都市祭礼における流動層〉, 《日本民俗学》205号, pp. 31—69。
- 和崎春日
 1987 《左大文字の都市人類学》, 東京: 弘文堂。
 1988 〈都市祭礼と市民地平—大文字五山送り火における地域共同態と都市共同態〉, 《歴史と民俗》, 東京: 平凡社。
- 松平誠
 1990 《都市祝祭の社会学》, 東京: 有斐閣。
 1994 《現代ニッポン祭り考》, 東京: 小学館。
 2008 《祭りのゆくえ—都市祝祭新論》, 東京: 中央公論新社。
- 阿南透
 1997 〈伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造〉, 《祭りとイベント》, 小松和彦編, 東京: 小学館。
- 八木康幸
 1998 〈祭りと踊りの地域文化〉, 《現代民俗学の視点3 民俗の思想》, 宮田登編, 東京: 朝倉書店。
- 佐々木宏幹
 2000 《神と仏と日本人》, 東京: 吉川弘文館。
- 遠日出典
 1986 《神仏習合》, 東京: 六興出版。
- 柳川啓一
 1987 《祭と儀礼の宗教学》, 東京: 筑摩書房。
- 藪田稔
 1969 〈祭りと都市社会〉, 《国学院大学日本文化研究所紀要》, 23号。
 1987 《神道—日本の民族宗教》, 東京: 弘文堂。

谷部真吾

1997 《祭りに見られる対立と意味—遠州森の祭りの事例から》，慶
応義塾大学大学院社会学研究科修士論文。

森田三郎

1990 〈祭り研究の視点—文化人類学的アプローチ〉，《祭りの文化
人類学》，京都：世界思想社。

芦田徹郎

2001 《祭りと宗教の現代社会学》，東京：世界思想社。

中根千枝

1967 《タテ社会の人間関係》。東京：講談社。

米山俊直

1986 《都市と祭りの人類学》，東京：河出書房新社。

安藤優一郎

2005 《観光都市江戸の誕生》，東京：新朝社。

竹内誠

2000 《江戸の盛り場・考—浅草・両国の聖と俗》，東京：教育出版。

倉沢進、秋元律郎 編

1990 《町内会と地域集団》，京都：ミネルヴァ書房。

福田アジオ

2004 〈寺と檀那〉，《寺墓先祖の民俗学》，東京：大河書房。

台東区のおゆみ

一 むかしむかしの台東区

- 原始・古墳時代……………二四
- 奈良から平安・鎌倉時代へ……………二九
- 室町時代……………三三

二 江戸の下谷・浅草

- 市街化の促進……………四〇
- 町人の町……………四三
- 寛永寺と浅草寺……………四六
- 遊里と芝居街……………四九
- 寮・別荘のある風景……………五二

三 台東区の一〇〇年

- 上野公園・浅草公園……………五九
- 町のうっぴりかわり……………六三
- 台東区の現況……………六五

台東の自然と生活

一 地勢

- 二 中小河川と池……………七〇

- 三 交通の発達……………七四
- 四 問屋街……………七五

台東区史跡散歩

- 一 プロローグ……………七六
- 二 上野公園界限……………八〇
- 公園入口山王台付近……………八二
- 竹の台・東照宮界限……………八六
- 東京国立博物館周辺……………八七
- 寛永寺と將軍の墓……………九一
- 不忍池のあたり……………九三
- 三 谷中地区……………九五
- 都靈園……………九八
- 天王寺靈園……………一〇〇
- 谷中寛永寺靈園……………一〇二
- 四 入谷・根岸・三ノ輪付近……………一〇四
- 五 浅草橋・蔵前・鳥越のあたり……………一〇七
- 六 浅草寺周辺……………一一〇
- 七 浅草の北部……………一一三
- 八 浅草通りに沿って……………一一五

伴天連追放令と小倉藩

伴天連追放令

ここでは寺と檀家がどのような条件でつながりができたのかについて考えてみたいと思う。すでに七〇年ほど前、豊田武は『日本宗教制度史の研究』において、「慶長十九年（二六一四）京都において、転びキリシタンを寺院の檀家にして、請文（寺請証文）をかかせた例がある」と指摘している。

もちろん慶長十八年十二月、幕府は伴天連追放令を布達しているし、このような事例があることはわかるが、一方で京都以外の地域でも翌年に寺請証文（転び切支丹について）を作成したかどうか、これまで疑問視されていた。そこでまず伴天連追放令について検討し、京都以外の地、すなわち小倉藩領においても転び切支丹の寺請証文が作成されていた例を紹介してみたい。

伴天連追放令が布達されたのは慶長十八年十二月二十三日である。金地院崇伝が案文を作成し、

將軍徳川秀忠の朱印を付し、布達された。板倉周防守重宗がこれを持って京都に赴いている。翌十九年正月三日、キリシタン追放総奉行小田原藩主大久保相模守忠隣が小田原を出発し京都にむかった。

この追放令の主旨は「伴天連は政令に背き、日本の神仏を批判し、後世には国家の患となるので、すみやかに邪法を斥くべし」というものである。『当代記』の正月十八日の条には、

京・大坂の伴天連宗（キリスト教）迷惑このことなり、伴天連師匠の寺（教会）二か所あり、右の内西京寺（教会）は焼き払われ、四条町中にこれある寺（教会）は、類火もいとわず、こぼちて火をつけらる。師匠（宣教師）両人は家財の構なく、西国に退く

と、大久保忠隣が京都に到着するとさっそくキリスト教の京都の教会二つを破却・焼却し、宣教師を追放している様子が記されている。大久保忠隣上洛の目的は、同書に、

これ京・大坂に伴天連門徒、年々に倍増して経超たり、これを退治せんため差上らる。ことの躰によりては九州長崎までまかり下るべきとおおせなり。

とあり、京・大坂に勢力をもっているキリシタンを退治することが目的であったこと、さらにとと次第では長崎まで行くよう指示されていたようである。

正月二十六日「駿府記」によると、

松平筑前守利常使札到来す。高山右近□

商売繁盛の神々 118

道祖神と地藏信仰 120

縁日と初午 122

祭りの習俗 125

おみくじ・あみだ・宝くじ 125

辻占い 126

テルテル坊主 127

浄めの塩 127

肩車・胴上げ・手打ち 129

太神楽・万歳 130

ワッショイ 131

第三章 祭りの起源と信仰 133

神祀りのルーツ 134

*玉を奪い合う勇壮な神事——宮崎宮玉せせり 136

*性を歌いあげる奇祭——飛鳥おんだ祭 140

*数千人が引き合う綱引き——刈野の大綱引き 145

*古来の姿を止める裸祭り——黒石寺蘇民祭 149

*今に伝わる平安の仮装行列——やすらい祭り 154

*荒々しい「御柱」の祭典——諏訪大社御柱祭 157

*夏祭りはここにはじまった——祇園祭 161

*神々の魂を浄める大松明——那智の火祭り 169

*豪快な張り子が踊る「ねむり流し」——青森ねぶた祭り 171

*神楽の古儀を伝える神懸かりの託宣——大元神楽 176

*鬼と人が一体となる春迎えの祭り——花祭り 180

の分析・考察方法である。私が人類学の勉強を始めた頃（いまから三十年ほど前）は、ちょうど欧米の人類学界では、構造主義が流行しており、ご多分にもれず、私もその洗礼を受け、その猿真似のような論文をいくつか書いてきた。最近では「〇〇の構造分析」などといった大上段に方法論をふりかざした論文を書くことはなくなつたが、私が書くものの根底にあるのは、やはり構造分析的な視点だと言つていいだろう。

たとえば、最近、民俗的資料を主な素材にして貨幣について考察してみたいと考え、暇を見つけてはメモを取つている。その際の問題の発見と整理の仕方として、たとえば、「貨幣の呪術性、呪術の貨幣性」「貨幣交換と贈与交換」「社会関係における生産的交換と破壊的交換」といった項目を立てて、それに当てはまる現実の事象はどんなものがあるかをあれこれ考えるようにしている。このようなテーマ設定自体が、構造分析的だといえるはずである。すなわち、つねに対立項を想定し、それとの関係で、特定のテーマや対象を考察するクセがついてしまつているのである。そのような思考の仕方を刷り込まれてしまつていゝわけである。

とりわけ興味深かつた点は、構造主義はモデルという概念を用いて、特定の社会には現実には存在しない、あるいは存在しえないような事象を想定することができるということである。たとえば、男性出自原理と女性出自原理、男権社会と女権社会といったモデルを想定し、この双方のモデルを組み合わせて社会のモデルをさらに想定する。そうしたモデルに相当する社会が現実存在するかと考へたりすることが出来るわけである。この方法は、**維多利亞**を整理するにはと

でも便利なのである。

たしかに、方法にも流行り廃りがある。いまは、若い世代には、ポスト構造主義の人類学がもてはやされている。かれらの多くは、何事にも、政治性、権力性、現代性といったことを見出すように刷り込まれているかにみえる。にもかかわらず、私は構造主義世代として、相変わらず、構造主義的視点で、自分の興味のあるテーマを追いかけていゝ。それがやはり私の思考に合つていゝからである。

振り返つてみると、構造分析という方法は想像以上に普遍的な性格をもつた方法であると思う。私は修士論文で、人類学者が扱つたことがない、十三世紀製作の絵巻「信貴山縁起絵巻」を取り上げ、その構造分析を試みた。それは「信貴山縁起の人類学的考察」と題された。これが当時の人類学教室では、なんのクレームをつけられることなくパスしただけでなく、審査教官たちから、幕末の江戸で流行した「鯨絵」を構造分析したオランダの人類学者コルネリウス・アウエハントの研究を紹介されたのである。これが後に中沢新一や飯島吉晴、古家信平と私とで翻訳した『鯨絵』（せりか書房）であつた。さらに修士論文の延長として、中世末ごろに製作されたお伽草子の一つ「物くさ太郎」を取り上げ、「『ものくさ太郎』の構造論的考察」という論文を、学会誌の『民族学研究』に投稿し掲載された（『説話の宇宙』人文書院、所収）。これが可能であつたのも、構造分析は人類学的分析方法であるという認識が、当時の査読者にあつたからである。構造分析は、空間を越えて異なる社会の研究のみならず、時間を越えた過去の社会の文献による研究、すなわ

I 神なき時代の民俗学

神なき時代の祝祭空間 7

「民俗」はどこにあるのか 38

新しい「民俗」を求めて 72

「たましい」という名の記憶装置 110

祭祀のメカニズム——「呪い崇り」から「祝い祀り」へ 129

誰が「たましい」を管理できるのか——人を神に祀る習俗再考 151

II 民俗学の視角

「民俗調査」という旅 183

説話と宗教儀礼 203

魔除け論序説——屋根の上の魔除けを中心に 227

桜と民俗学 241

あとがき 250

一 むかしむかしの台東区

原始・古墳時代

現在の東京湾は、大昔、関東平野の奥深くまで湾入していた。学名上、その湾を奥東京湾と呼んでいる。原始時代の台東区は、大部分が奥東京湾の海底であった。当時の地形を想像すると、

- ①下谷・浅草は奥東京湾の海底。
- ②待乳山・浅草寺周辺・鳥越付近は奥東京湾に浮かぶ砂洲または島。
- ③上野台は奥東京湾に突出した半島。
- ④上野・本郷両台地にはさまれた低地部は、奥東京湾の細長い入江。

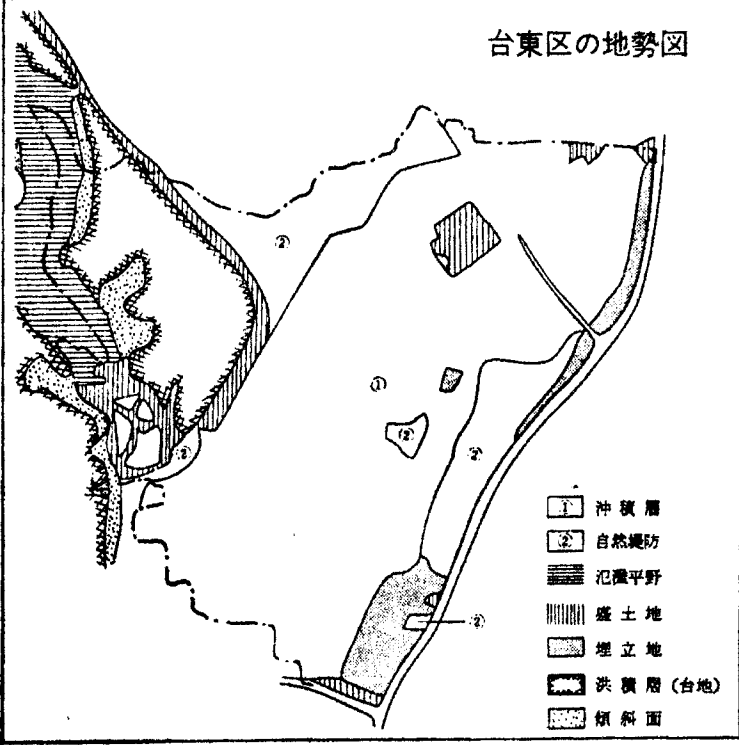
だいたい、このようになる。人間が住める所といえば、上野台しかなかった。上野台は武蔵野台地豊島台の一支脈で、区内では数少ない洪積層である。ほかには、待乳山が洪積層だといわれている。待乳山は元来、真土山と書いたとする説がある。洪積層なので、真の土だとして真土山と書き、同音雅字の待乳山に書き改めたという。

現在の地勢図は別掲のとおりである。沖積層の部分が奥東京湾の海底、氾濫平野がその入江、洪積層が半島——おおよそこうなる。自然堤防は、川の流れて自然にできた堤防状の土地の高まりで、島もしくは比較的早く陸地化した地帯と考えてよいだろう。

先祖が区内に住み、生活を営むようになったのはいつごろからであろうか。原始時代の遺跡発掘状況からみて、それは縄文時代中期ごろからであったように推察される。酒詰伸男氏の『日本貝塚地名表』によると、区内の貝塚発掘地は、①谷中天王寺五重塔付近・同キリスト教墓地内、②桜木町付近、③上野公園新坂・徳川靈屋および東京国立博物館構内、④初音町四丁目、⑤谷中坂町、⑥上根岸町、⑦鳥越神社境内となる(番号は貝塚群を示す)。

このうち⑥と⑦を除き、発掘場所

台東区の地勢図



第一章 日本の祭りの源流 13

日本人の祭り 14

「まつり」とは何か 14

神ながらの道 17

祭りの決まり事 20

「祭り」と「祭礼」 20

依り代としての「ご神木」 23

移動するご神体 27

神をお迎える 31

「お籠もり」という儀式 31

祭りの中心は「宵宮」 36

神との食事「直会」 39

祭りという神事 42

吉凶を占う 47

勝ち負けを競い合う 47

「稚児」の存在 50

神輿と山車 54

四季の祭り 58

稲作と春秋の祭り 58

ケガレを祓う「火祭り」 62

厄を祓う「水祭り」 65

宮中の祭り 68

「神嘗祭」と「新嘗祭」 68

魂の再生 71

I 神なき時代の民俗学

神なき時代の祝祭空間 7

「民俗」はどこにあるのか 38

新しい「民俗」を求めて 72

「たましい」という名の記憶装置 10

均質化した社会、ハレとケが接近し混合してしまったかのような社会、しかも明るい豊かな未来を喪失してしまった社会。このような社会の人びとは、向かうべき未来への指針がなくなり、先行き不透明なこの現在をとりあえず生きざるをえないために、D・リースマンによりながら吉見俊哉が述べるように、「絶えず相互に微少な差異を競いあい、互いを互いの意味の遡及点とすることで、おのれの現在の位置を確認していく」ことにならざるをえない。吉見はこうした人びとは周囲のまなざしに気を配る「演技する」人間であるといい、驚田清一は内面を喪失した外面だけの人間であるという。もっとも、阿部謹也が指摘するように、近代以前の大半の日本人は常民が先祖の人生の繰り返し、毎年の同じことの繰り返し、生活を過こし、「世間の目」を気にしながら行動していた、ということ想起すれば、高度成長によって生活水準こそ上昇して多くの人びとが「中流」にはなったものの、彼らの階層意識がレベルアップしただけで、けっきよくは社会全体から見れば、彼らはなお民俗学でいうところの「常民」なのだということになる。

閉塞した時代の「異界」探し

日本列島に大衆文化という均質な文化が行き渡り、その文化が向かうべき方向を失ったとき、人びとが見出したのが、「本物」の文化であり、「ふるさと」という文化であり、「テーマパーク」であり、「旅行」等々であった。現代の世相を彩っているのは、こうした文化である。この文化は重複・錯綜し表面的には異なっているが、高度成長期を支配していた「進歩によって到達する未

来」を基本的モチベーションとする文化とは異なったものという点で共通している。

この文化では、ハリボテの生活に気づき、それを「本物」にしたいという人びとは、高価な「本物」の商品の購入に情熱を注ぐ。ハリボテの家具を本物の家具に漸次置き換えていくことに、他人との差異を見出そうとする。それはハレ化のさらなるハレ化であった。あるいは、かつて存在し高度成長によって失われた「ふるさと」——それは情報のなかで作られ出された美しい「ふるさと」なのだが——に触れたい人は、都会で失われた生活を伝承しているという都市から遠く離れた地域を訪問し、その土地でとれた、無添加の素材を使った、手づくりの食事を食べ、その地域の「高級な」特産品をみやげに買う。それもまた、その人にとってはハレなのである。

あるいはまた、もはや日常の延長と化してしまった繁華街や享楽街の施設とは異なる、世俗を忘れさせてくれるような異空間を求めて、東京ディズニーランドや京都の東映太秦映画村、長崎オランダ村や三重スベイン村などのテーマパークに足を運び、しばし世俗では体験できないファンタジーや異文化の世界に身をまかせる。これもまた現代人にはハレなのである。信仰としての異界を見失ってしまった現代人にとって、テーマパークは、それがテクノロジーと情報によって構築された商品としての異界であつても、それが世俗とは異なる刺激と興奮を与えてくれる心地よい場所だからだ。

そして、これに満足しえない人びとが新々宗教などに向かうことになるかもしれないし、「本物」を求めて、歴史がある「田舎」に向かったり、海に向かうの「異国」に旅することになるか

3 地方社会への広がり……………61
4 王権側の論理と大寺院の対応……………79

第三章 怨霊信仰の意味するもの……………87

1 御霊会とは何か……………91
2 道真の怨霊をめぐる説話……………102
3 反王権のシンボルから王権守護神へ……………111
4 怨霊信仰をもたらした社会的背景……………120

第四章 ケガレ忌避観念と浄土信仰……………133

1 王権神話が伝えるもの……………136
2 ケガレ忌避観念の肥大化と物忌み……………144
3 日本的浄土信仰Ⅱ『往生要集』の論理……………149
4 極楽往生を願う人びと……………158

第五章 本地垂迹説と中世日本紀……………165

1 仏教の論理に包摂・統合された神々……………168
2 王権神話の読みかえと創造……………178
3 王朝国家の危機のなかで……………188

結 普遍宗教と基層信仰の関係をめぐって……………201

主要参考文献

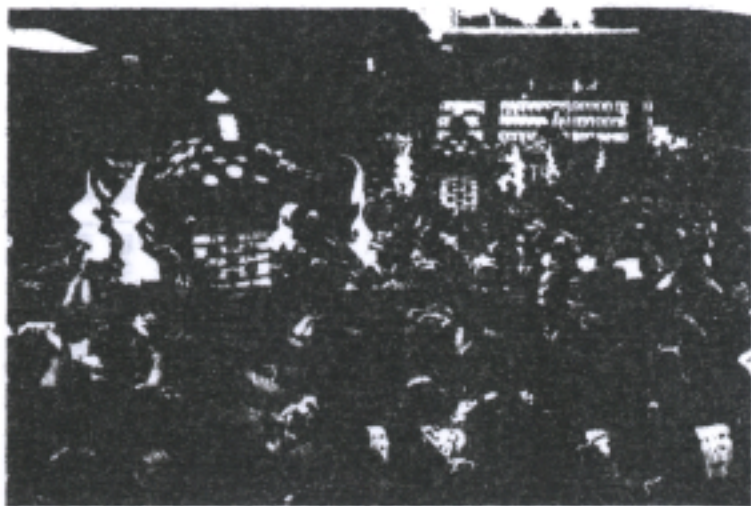
あとがき

最上孝敬『靈魂の行方』名著出版、一九八四
岩田重則『戦死者靈魂のゆくえ』吉川弘文館、二〇〇三
岩田重則『戦争のフォークロア』『岩波講座アジア・太平洋戦争』六、二〇〇六

あとがき

今年五月はじめに筆を執り(パソコンのキー・ボードをたたきはじめ)、九月はじめに摺筆した。メモもまったくないところで、職務や調査のあいまあいまに、一気に書いてしまった。本書を書き下ろすにあたって、できるだけ自分のフィールド・ワークによる資料だけで構成しようと考えた。これまでは、そうすることを半ば意図的に避け、他者による調査報告をも使用するべきであると考えてきた。それは、自分の調査不足を補う意味よりも、他者による調査に敬意を払い、同時に、そこから自分の視野の外にある多様な現実を汲みとる必要性を感じていたからである。どんなに歩いても、ひとりの人間ができるフィールド・ワークの量などががしれている。フィールド・ワークは質である。

あとがき
ふと気づくと自分が四〇歳代も半ばになっていた。はじめてフィールド・ワークなどというものを見よう見まね、自己流でしてみたのが、大学一年生一九歳のとき。まだまだ若いつもりだが、あれから二五年余がたっている。四半世紀ということになる。「継続は力なり」ではないが、すこしずつでも続けていけば、それなりに資料も蓄積されてくる。手もとにある自分の



浅草の三社祭 東京・浅草の浅草神社の祭礼。毎年5月17・18日ごろに行なわれる。

祭礼に参加し、互いに親睦を深めている。神社の祭りは人と人を結びつける重要な役割を果たしている。

各神社の年中祭祀の中で、基本的な祭りは祈年祭と新嘗祭である。ほかに、その神社独自の祭りも行なわれている。これを特殊神事という。また、一般的な神社では、毎月一日と十五日に月次祭を行っており、月参りを続けている氏子もいる。

しかし、なんといっても、その神社でもっとも重要な祭りは例祭である。これを大祭ともいう。大祭は一年に一度、決まった日に行なわれる恒例の祭りである。一般に「お祭り」「例祭」といえば例祭のことである。例祭日は神社の祭神や由緒によって定められているが、その

神社と祭り

地域の神社には地域の神が祭られており、その地方ならではの祭りが行なわれる。年に一度の例大祭の日になると鎮守の森も朝から賑わう。多くの住民が神社に集まってくる。神楽殿では神楽が行なわれたり、境内の相撲場では相撲を行なう神社もある。氏子らは神社の祈年祭と新嘗祭を伝統的な祭祀として重視している。一方、社会や経済生活が時代とともに推移し、それに伴って新しい祭りも生み出され、神社の祭りは複雑となっていくた。

また、わが国は四方を海に囲まれている海洋国だから、海を生活基盤としてきた。そのような漁民の祭りにも古式なものがみられる。漁民を守護する神社では、正月二日には船祝と呼ばれる祭りが行なわれる。船祝の祭りは地方によって名称を異にするが、どの地方も祝いの舟唄を歌いながらその年の大漁を予祝し、海上の安全祈願をするところは共通している。

このような産業のみならず、地域の神社はその土地の人々の信仰、自然、文化、社会、政治、経済、生活、芸能などの歴史を包蔵して今に伝えている。したがって、地域の神社はその土地の歴史に力強さを与え、郷土色に豊かな彩りを添えてきたといえよう。

ます。したがって、現在行っております思想史関係のことを中心にと、今回の講演を考え
ております。それをお話するだけで与えられた時間が足りなくなるかなと思います。それ
で、今日はとくにこの十年ほどの間やってまいりました思想史関係のところを中心にして
お話をさせていただこうと思います。

この十年ほどの間に私が書きました思想史関係の論文は、おそらく十本以上になるかと
思います（巻末「参考文献一覧」参照）。その十本ほどの論文を一時間半の間にまとめて全部
ご紹介するというのはなかなか至難の業でございます。したがって話が大変粗っぽいこと
になろうかと思えます。それで史料を一応お配りいたしました。本当は史料も一切使わな
いと思つたのですが、やはり思想の話になりますと、どういう言葉で語られているかが
わからないとイメージがつかめませんので、必要最小限のものだけ出しました。他にもプ
リントにないような史料を、いろいろご紹介するようなこともあろうかと思えます。そ
ういう意味で大変わかりにくいことになろうかと思いますが、そのへん、あらかじめご了
承のほどよろしくお願いいたします。

一 近世仏教への視点

本日のお話は、江戸時代を仏教的世界と見ることができないかという提言を中心にした
いと思っております。実際そのような名前の論文を最近書いたわけでございますが、そう
いうように見ていくことが大変重要であろうかと考えております。そして江戸時代が仏教
的世界であるというように考えていくことから、今まで見えなかったものがいろいろ見え
てくると、そういうことをお話ししようと思えます。

そこで、「仏教的世界としての近世」〔参考文献一覧〕論文⑦〕という題名でもよかったの
ですが、すでにそういう題名で論文を書いておりますので、同じことをまた蒸し返すのも
どうも気が進まない、どういう題名にしようかと考えた挙句に、「日本仏教の近世」とい
うタイトルにさせていただきました。史料のほかにレジユメを一枚つけまして、お話をす
る概要、主な項目を列挙したようなものがございますけれども、挙げておきました。そこ
に、「視点」といたしまして、「中世日本仏教が近世を迎えたときどうなったか」と、こう
いう言葉を書いておきました。「日本仏教の近世」という題名はそういう意味合いでござ
います。中世に日本仏教として集大成されたといいますが、最高峰まで上り詰めた日本の

日本仏教の近世……………	3
はじめに	3
一 近世仏教への視点	5
二 権力者と仏教	12
三 民衆仏教の形成	24
四 住み着いた仏教	36
日本近世の聖なるもの——徳川王権と都市……………	44
はじめに	44
一 なぜ神聖化が必要か	48
二 家康生前の神格化	54
三 家光政権中枢での体制神聖化	59
四 家光期権力周辺での神話形成	65
五 綱吉期における始祖神話の成立	70
六 都市の神聖性	75

思ふこと叶はねばこそうき世なれ……………	79
はじめに	79
一 「浮世物語」の浮世	80
二 「恨の介」の往生	84
三 「薄雪物語」の行き詰まり	90
四 「露殿物語」での浮世化	94
五 「七人比丘尼」の煩惱即菩提	100
おわりに	107
江戸の真宗——研究状況と課題……………	110
はじめに	110
一 なぜ問題なのか——寺権関係と民衆	111
二 真宗の世界観の問題——安丸良夫氏の研究から	116
三 イデオロギ―と真宗——ヘルマン・オームス氏の研究から	121
四 神祇不拝・墓のない村——見玉識氏の研究から	124

ろうか。

「お墓」に対する温度差は人による。無関心な人から、鋭敏になっていく人まで、幅は大きいと思われる。しかし、「お墓」とは、と聞かれたとき、たいがい人が思い浮かべるイメージに大差はないだろう。近年では、お化け屋敷に登場するような、ひとだまが飛びかうおどろどろしい世界をイメージする人はすくない。整然と区画された墓域に林立する「お墓」を思い浮かべるのがふつうであろう。

しかしこの、いまわたしたちがどこでも見ることのできる「お墓」、そこにも、それなりの意味や展開過程があったことに思いをおよぼす人はすくないと思う。逆にいえば、それだけ、「お墓」はわたしたちの日常生活にとけこみふつうのことになっており、疑問をもたれることがすくない社会現象となっている。

そうであるからこそ、ふつうのことであるからこそ、その存在の意味を、わたしたちは知っておく必要があるように思う。ふつうのことからくりを知ってみると、それが、あんがい奇妙であったり、変なことをしているのだなあ、と感じることもあるはずである。「お墓」とは何か。

その社会現象の意味をすこしずつ解いていってみることにしよう。

目次

はじめに

第一章 お盆の儀礼から何が見えるか…………… 1

1 「迎え火」「送り火」の一般的常識…………… 2

「迎え火」「送り火」の認識／現実と認識とのズレ／
ミクロな観察／近隣の不一致／社会現象をどう見る
か／「迎え火」「送り火」の現実／柳田国男の「迎え
火」「送り火」論

2 盆棚は先祖を祀るのか…………… 20

同時進行する儀礼／複数の祭祀対象を祀る／神田

常的空間のもつ意味

俗界の中の聖地

173

流行神の盛行

境の盛力

池袋村の流行神

奇事異聞の世界の意味

「歳時記」の基礎

江戸の神仏

179

仏教の日常化

浅草寺内の神仏

現世と閻魔

江戸の生活文化——市井の年中行事と関連させて——

190

行動文化の諸相

江戸町人の年中行事

年中行事の特徴

あとがき

200

江戸歳時の思想

休み日と物忌み

ハシとケの交わり

「歳時」とか「歳事」は、年中行事に等しい表現である。江戸という地域社会の住民たちの日常生活文化の具体相をとらえる場合、江戸人がどのような歳時を営んでいたかを知ることが、年中行事を支える思想を知ることであり大変興味があると思われる問題であろう。

1 江戸歳時の思想
斎藤月岑の『東都歳事記』の序には、「毎歳江戸にあらゆる神社の祭祀、仏院の法会、并に貴賤歳時の俗事に至る迄、節序に随て是を輯録し、遠邦他境の人をして東都歳事の繁多なるあらましを知らしめんとす」と記されており、時節の移りかわる順序にしたがい、神社仏閣の行事と貴賤の俗事を記しており、それらは古典的な史料として眼にふれることができる。

へ買物にいく」／赤飯のおむすびと枕飯／赤飯のおむすびに棒を立てること／現実と対応していない一般的常識

第二章 葬送儀礼と墓

1 葬送儀礼における靈魂

いまわのきわの物語／靈魂分離の概念と葬送儀礼／「両墓制」に靈魂觀をみる説／民俗学の陥穽／忌避される遺体と死靈／葬送儀礼を觀察する／出棺の際の奇妙な行為／死靈を追放する／穴掘りと埋葬／葬列の回転／遺体への死靈の附着／葬式組の役割／幽体離脱の物語

38

37

2 埋葬と石塔建立のあいだ

家の墓と共同墓地／先祖代々墓／先祖代々墓の原型／遺体の埋葬は石塔の下ではなかった／石塔は時間を隔てて建立される／墓とは何か／遺体とともに死

66

靈を封鎖する／仏教的石塔との併存／先祖祭祀の政治性

第三章 「お墓」の誕生

1 画一化していく墓

墓制研究のとらえなおし／墓制研究のはじまり／用語としての「両墓制」／「両墓制」からの用語の拡大／墓の分類基準を設定する／「両墓制」と「単墓制」の同質性／カロウト式石塔への納骨／葬儀の現代的変容／土葬の現代的変容／カロウト式石塔への転換／土葬の解体と石塔の拡大／民俗的火葬による遺骨埋葬／画一化した「お墓」への転換

94

93

2 共同幻想としての「お墓」

考古学からわかる中世の墓／えがかれた中世の墓／考古学からわかる近世の墓／角柱型石塔の誕生／近現代まで含めた考古学の石塔調査／共同幻想として

129

はじめに

第一章

仏の顔も二度まで、さわらぬ神に祟りなし——祈願のかたち——

キーワードは「祖先さま」 5
「ニッポン教」の基礎知識 15

穢きと祓いの繰り返し 22

塩を撒き、塩を盛る 32

願をかけるというのは、物を掛けるということ 38

七・五・三と数の浄・不浄 44

「百ヶ日参りが百度石」にみる「縮み」の合理 52

絵馬とおみくじの遊戯化 59

第二章

お正月さまゆらゆらぶらぶら——カミ迎えの構図——

天降り峰走るカミ・ホトケ 68

高きはためきと清き音で神霊をよぶ 74

第三章

祖先さまへの申しわけ——供養とまつりの意義—— 103

カミが依り憑く青き葉と白き紙 82

鏡餅を分けてこそが歳魂 91

トケと異臭で邪気悪霊を絶つ 98

神仏をつなぐ祖霊 祖霊をつなぐ生見玉 104

なぜ盆の夜に踊るのか 112

四九日を過ぎてなわら中とは 119

墓事情は現代人の安居 安住の願いとともに 126

東アジアでの祖霊信仰と稲作 135

第四章

おぼけが出るところ、カミが棲むところ——視覚・心象の聖地化—— 143

幽霊は丑三つ時、妖怪はたそがれ時 144

水辺に集うカミあれど 150

山島に霊山霊峰無数にあり 157

登拝もしたいが遙拝ですます 162

登拝もやがて遊山となり 170

